

「スカンクキャベツ」 ザゼンソウ植物体のおい成分

「スカンクキャベツ」の名の由来ともなっている、ザゼンソウの植物体が傷ついた時に発生する、強烈なおいについて解明しました。

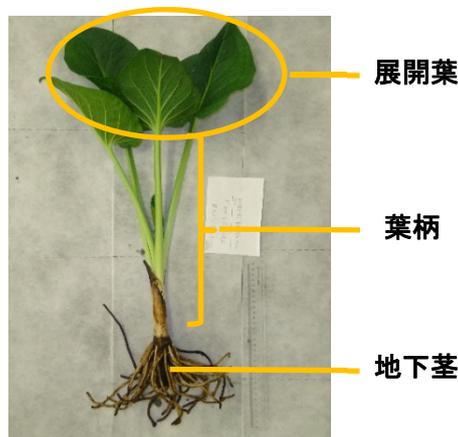
ザゼンソウ (*Symplocarpus renifolius*) はサトイモ科ザゼンソウ属の多年草で、雪解けの時期に暗紫褐色の仏炎苞に包まれた花を開きます。開花時には花序が発熱し独特のおいを放つことで知られています。また、植物体が傷ついた時には更に強烈なおいを発生することから英名はスカンクキャベツとも呼ばれていますが、この名の由来ともなっている植物体が傷ついた時に発生するおいについては未だ解明されていません。そこで本研究では、ザゼンソウの植物体が傷ついた時に発生するおいを解明する目的で分析を行いました。



この研究成果は 2016 年 10 月 29 日～31 日に開催された第 60 回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会（会場：東京農業大学 オホーツクキャンパス／網走）で発表しました。本研究は、東京農業大学との共同で行いました。

【研究内容の概要】

地下茎、葉柄および展開葉を刻んだときのおいを確認したところ、展開葉はリーフィーグリーンな香りに加えややガーリック様の香気が、地下茎と葉柄はやや腐敗臭を伴う強いガーリック様の香気が感じられました。この腐敗臭を伴った強いガーリック様香気が「スカンクキャベツ」の名の由来となっていると考えられます。それぞれのおいをダイナミックヘッドスペース法で分析した結果、ガーリック様香気や腐敗臭を有する多数の含硫化合物が同定されました。同定された含硫化合物のなかには、分子内に複数の硫黄原子を含むものも数多くありました。さらに、今まで香気成分として報告されたことない含硫化合物もはじめて同定することに成功しました。また、今回、同定された含硫化合物のほとんどは炭素-炭素結合を持たない化合物、すなわち炭素原子と炭素原子の間には必ず硫黄原子がある構造でありました。このことは、傷ついたザゼンソウから発生する含硫化合物の特徴と考えています。



【発表学会】第60回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会（網走）2016年

【発表タイトル】「スカンクキャベツ」ザゼンソウ植物体のおい成分

【発表者】坂巻憲佐¹、勝見優子¹、黒林淑子¹、菅原圭稀²、久保田紀久枝²、小栗秀²

¹長谷川香料株式会社総合研究所 ²東京農業大学